



県内唯一の地芝居 「牧歌舞伎」の 伝承



牧歌舞伎は江戸時代中期より伝わり、県の無形民俗文化財に指定されてきましたが、伝承者がおらず幻の歌舞伎と呼ばれていました。昭和56年にこの牧歌舞伎を蘇らせ、以来30年以上公演しているのが、地元青年団有志でつくった「牧歌舞伎保存会」です。

牧歌舞伎の復活にあたっては、記録映像や地域のお年

平成25年度 牧歌舞伎地元公演「仮名手本忠臣蔵」 寄りからのアドバイスを基に、猛稽古を積み重ねたそうです。「皆、牧の『炎』を消すな、との一心で、役は体型や趣味をもとに配役。三味線はロックギタリスト、義太夫はカラオケマイスターと、気心の知れた仲間だからできる無茶な配役でしたね」と結成時の苦労を話してくれました。

また、県内で唯一、地芝居文化が残っていることを「牧の地域性かな」「そう、『牧』っていう魔法だね」と話します。

地元を愛する皆さんの思いから復活した牧歌舞伎。課題の後継者の育成について「17年間、常盤中の生徒に歌舞伎指導を続けています。楽しみです」とぬかりがありません。

牧歌舞伎を愛し、誇りに思う地域の支援と期待を背に、「上手く演じることが全てではない。残すことが大事なんだ。永く続ければ本物になる」との、初代会長・故石林万吉さんの言葉を守り、活動を続ける「牧歌舞伎保存会」。その姿には、地域の伝統文化を後世に伝承していくための責任と覚悟がありました。



取材に応じる「牧歌舞伎保存会」の皆さん(右から順に飯塚さん、中村さん、藁和田さん、篠田さん)

福岡県芦屋町と 災害時における相互支援協定を締結



波多野芦屋町長と協定書を
交わす岡部市長

11月13日、佐野市と親善都市である福岡県芦屋町と「災害時における相互支援協定」を締結しました。この協定は災害が発生した際に、被災者や物資などの支援を行うものです。

佐野市は広域にわたる相互支援協定として「北関東・新潟地域連携軸協議会」、

「全国へそのまち協議会」、「廃棄物と環境を考える協議会」の加盟自治体間で協定を結んでいます。単独市町間での協定としては、同じく親善都市である滋賀県彦根市に続き2例目となります。

佐野消防署の山岳救助訓練

佐野消防署では11月8日・11日に、佐野市運動公園の敷地内で山岳救助訓練を行いました。

この訓練は実際の現場で「安全・確実・迅速」な活動ができるようにすることを目的とし、特別救助隊20人が参加。入山者が滑落し、負傷した想定で、ロープや滑車を活用し、救助訓練を行いました。

近年、山林での事故が増えています。入山する際には、火気の取り扱いや単独行動をさげ事故などに十分注意しましょう。



白い粉から、うどんを作り上げました



地粉で
手打ちうどんづくり

10月末、みかもクリーンセンターで開催された「もったいないフェアさの2013」のイベントのひとつとして、地粉を使った「手打ちうどん」の講座が行われました。

うどんの粉も、天ぷらの野菜もすべて地元産と、「地産・地消」を謳いながら、講師の植竹みつ子さんに、こね方・打ち方を教えていただきました。

最初の水回しで、粉と水が混ざり、きれいなそばろ状になると、みんな大喜び。めん棒の使い方に四苦八苦しなから、手打ちうどん作りに挑戦していました。

母親と一緒に参加した、島田浩希君は「めん棒を使って生地をのばしていくところが面白かった。自分で作ったうどんはとてもおいしかった」と話してくれました。

寒いこの時期、休日は粉まみれになって、ひと手間かけた手打ちうどんのおいしい煮込みはいかがでしょうか？（市民記者・秋山久美子）

FANTASIC ILLUMINATION IN SANO 2013/佐野市景観賞表彰式



11月9日から、佐野駅前交流プラザ「ぱるぼーと」周辺でイルミネーションが点灯しています。約5万球のLED電球が、毎日午後5時から10時まで点灯し、2月28日までお楽しみいただけます。ぜひお越しく下さい。



まちなみ建築部門



まちづくり活動部門

この点灯式が行われた11月9日には、点灯記念イベントのほか、「水と緑と万葉のまち景観賞」の表彰式が開催されました。「まちなみ建築部門」と「まちづくり活動部門」の2つの部門で、計11の建造物と個人・団体が表彰されました（詳細は市ホームページに掲載しています）。

佐野市
ばんたい

高齢者も使わなくなった 「ウツツアシー」

人や動物の声が大きくうるさいときには、腹立たしく感じることもさへあります。「うるさい」とか「やかましい」の方言には、セヤシネー、セアシネー、セワシネーなどがあります。これらの方言は「忙しない」が変化したもので、現在でも地域や年齢に関係なく広く使われています。

「家中でフットビマールンジャンナー（跳び回ってはいけないよ）。子どもは外でアスピナ（遊びなさいよ）。フロントニ（本当に）セヤシネーつたら、アリヤーシネー」

「うるさい」の古い方言に、ウツツアシーがあります。今では使用する人もなく死語となってしまいましたが、明治・大正生まれの人たちは、子どもが家の中で調子にのって大声を出しながら騒ぎ立てていると、よく「ウツツアシーぞ！静かにしろ！」などと言って叱りつけたものです。

物の音や動物の声以外でも、邪魔になるものがあったて、それが煩わしくうっとうしいと感じられたときには、ウツツアシーといえます。

「寝ていると、顔に止まったり手に止まったりして、マッサカ（非常に）ウツツアシー蠅だなあ」

ウツツアシーは、古語の「うるさし」が変化したもので、もとは「不愉快である」とか「煩わしい」という意味でした。

（市民記者 森下喜一）

